

忘れられた出発点

東京家政学院大学 山田 順子

本年6月26日に提出された臨時教育審議会の「教育改革に関する第一次答申」を通読してまず感じたことは、歴史認識の希薄さである。今日の我々の日本国憲法及び教育基本法がそこから出発したはずの戦争への反省という意識や姿勢を、すっかり忘却したのかとさえ思えるほどである。

かつては軍国主義への道を歩んでいた我が国は、敗戦を機に、第二次世界大戦へと突入し敗戦に至るまでを顧み、その間に我が国と我が国の人々が犯した数々の過ちを省み、これからは自由と平和を守り抜いてゆこうと誓ったはずではなかったのだろうか。

だが、これについて、答申ではごく軽く触れているのみであり、その姿勢は、深い反省からの出発というには距離があり過ぎる。むしろ、答申に目立つのは、その中で繰り返し説かれている、我が国の伝統文化を見直し、愛国心を育て、日本人としての自覚を持たせる教育の必要性の強調である。^(注2) 自国の伝統文化を見直し、国民としての自覚を持たせるような教育が大切であるという点には、異論はない。だが、日本人としての自覚ということの問題にするなら、我が国の歴史の流れの中で、自分たちにつながる自国の人々が犯した過ちを誠実に見据えることを忘れてはなるまい。

もとより、これはいたずらな自虐や露悪趣味とは全く異質のものであり、後に続く世代に再び同じ過ちを繰り返させないためにも欠くべからざるものである。

教育の終極の目的の一つは自己を向上させることであるとすれば、自分を含めた人間というものをよく知ろうとする姿勢は、その基礎にもなるだろう。そして、この過程の中で、人間の持つ尊さや健気さばかりでなく、弱さや愚かさまた時として残虐にもつながる暴力性などからも目を背けずに、それらを見つめることを通して、日本人という枠を超えた人間というものについて、より深く考えさせ理解させることが大切ではないだろうか。

このことを考えるために、スタンレー・ミルグラム(S. Milgram)による実験^(注3)を紹介したい。この実験は、彼自身ユダヤ人であるミルグラムの、ナチスによるユダヤ人大量殺戮のような残虐行為が行なわれたのはなぜなのかという切実な疑問をその出発点としているといわれている。

彼はまず新聞広告を出して、記憶と学習に関する研究に参加してくれる人を募集する。そして、応募してきた人を2名1組にして、クジで教師役と生徒役を決める。実は、このクジには仕掛けがあって、広告を見て応募してきた被験者には、必ず教師役が当たるようになっている。一方の生徒役は、広告を見て応募してきたようにふるまうが、実際は実験者(監督者)側のサクラなのだが、

もちろん教師役になる被験者はそのことを知らない。

教師役の被験者は、生徒役の被験者に単語の対を記憶する課題を出し、生徒役が誤答するたびに1段階（15ボルト）ずつ電気ショックを強めながらそれを与えるよう、監督者から指示される。

サクラである生徒役は、監督者とあらかじめ打ち合わせてあった通りに誤答を重ねてゆくので、教師役の被験者は電気ショックの電圧を上げてゆかねばならない。電圧は480ボルトまで上げられるようになっていく。

生徒役は、実際には電気ショックは受けていないのだが、与えられる電圧の水準に応じた苦痛を示す演技をする。135ボルトでは苦しげなうめき声を発し、195ボルトでは悲鳴をあげる。300ボルトになると、生徒役はしばらく壁を叩き続けやがて静かになるが、監督者は、無回答は誤答と同じとみなして実験を続けるようにと教師役の被験者に指示する。

教師役である被験者がもうこれ以上実験を続けられないと申し出ても、監督者は、まだ実験は終わっていないから続けるようにという。そこで、その被験者が再度もうこの実験には協力できない旨を告げれば、実験は終了する。

実際にこの実験を行なってみると、教師役と生徒役の間に壁があって生徒役の反応が見えない（但し、電圧が30ボルトになると壁を叩く音が聞こえる）条件では、教師役となった被験者の65%（40人中26人）が、生徒役に与えるショックの電圧を最後の450ボルトまで上げた。

電気ショックを与えられた生徒役が苦しむ様子がよく見えその声がよく聞こえる条件でも、被験者の30%（40人中12人）が最高の450ボルトまで電圧を上げている。

もちろん、教師役の被験者は唯々諾々として監督者の命令に従ったわけではない。だが、苦悩しながらも、その場面における合法的な権威者であると認められる者（この場合は監督者）からの命令なら、それが非人道的なものであっても、かくも多くの人々が最終的にはそれに従ったのである。

この実験結果は、人間というものの弱さと愚かさそして残忍さについて深い教示を与えてくれるが、重い失望感さえ抱かせられる実験結果でもある。

では、人間は弱く愚かであり、また時として残忍にもなるだけの存在なのだろうか。

実験の方法そのものは変えずに、今度は3人の被験者に教師役をさせる。但し、被験者3人のうち2人は例によってサクラなのだが、もちろん本当の被験者にはそのことは伏せておく。

実験を始めて電気ショックの電圧が150ボルトを超すと、教師役のサクラの1人が実験を続けることを拒否し、電圧が200ボルトまで上がるともう1人の教師役のサクラも実験へのこれ以上の協力を拒む。

このような状況のもとでは、監督者が最後まで実験を続けるように指示しても、それに従う被験者は10%に減少する。

この実験結果によれば、その場面において合法的な権威者と認められる者からの命令でも、自分の他にもその命令に抵抗してそれを拒否する人間がいれば、10人中9人は非人道的な命令なら拒否する、ということになる。

孤立した1人1人の人間は、往々にして弱く愚かなものである。たまたま自分が乗り合わせた車両で、酔漢にしつこく絡まれて困り果てている人から助けを求められても拘わり合うことを恐れて知らぬ顔をする人間がいたとしよう。その人物が、誤って線路に落ちたところに進入してきた電車の下にはさまれた見ず知らずの人を助けるために、たまたまその場面に居合わせた初対面の人たちと力を合わせて汗だくになって重い車両を傾けようと必死になる。同じ人物が、場面によってこのように全く違う行動を取るということが充分起こり得ることを証明した実験^(注4)もある。

人間というものに期待し過ぎてもいけないが、失望し過ぎる必要もないのかもしれない。

まず、身近な人々が生きてきた時代についてその過ちも含めて歪めることなく事実を教え、ともに学び、弱く愚かではあるが満更捨てたものでもない人間のありのままの姿を見つめることから、教育は出発すべきではないだろうか。

過去の失敗を誠実に振り返ることは、決して愉快ではない辛く苦しい過程である。だが、その過程を超えてこそ人間は成長してゆける。自分の後に続く世代はその力を持っているはずだと信じて、その過程をともに分かち合ってゆくことが教育の基本ではないだろうか。

敗戦から40年の歳月が経った。だが、日頃はむしろ善良な“ごく普通の人々”も一緒になって軍国主義への道を歩み、戦争に参加し、加害者にもなった事実は消し去ることはできない。そして、もちろん、消し去ろうとしたり、忘れたかのように振舞おうとすべきでないことは、言うまでもない。

この歴史の事実を誠実に見据え、省み、後に続く世代に伝えてゆくことは、決して愛国心を損なうものではないはずである。愛国心は自らの内に、自ずからわき上がってくる心情であり、上から植えつけられるものではないと思う。

政策担当者が教育のゆくえに心を砕くべきことがあるとすれば、それは若い世代が、自分が生まれ育ち日々の暮らしを営んでいる国を愛さずにはいられないような国家や政府の形成のために、政策担当者がまず自らを律してゆくことではないだろうか。

教育改革に関する答申の基本的姿勢の中に戦争体験の継承が見当たらないことに異議を唱えるのはアナクロニズムなのだろうか。

注

(1) それにわずかに触れているのは、「第一部 教育改革の基本方向」の中の「第二節 教育改革の意義」における以下の箇所のみである。(傍点、筆者)

我が国の近代教育制度は、明治、大正、昭和を通じて様々な曲折を経、とくに、極端な国家主義的な教育の傾向が強まった時期もあったが、その基本的考え方は、おおむね、個人の自立・発展を通じて、国家と産業社会の発展、すなわち我が国の近代化を推し進めようとするものであったといえよう。

「第二の教育改革」としての戦後教育改革は、戦時下を中心とする軍国主義のおよび極端

な国家主義的な教育を排除し、人格の完成、個性の尊重、機会の均等などを基本として、民主主義、自由・平等の理念を教育においても確立しようとするものであった。

(2) 以下に、関係する箇所を抜粋する。

- ・第四に、戦後十分には考慮されていなかった我が国の文化、社会の個性をしっかりと見据えて、日本人としての自覚を育む教育の在り方を示すことである。(第一部 教育改革の基本方向、第三節 本審議会の役割)
- ・本審議会は、—— 中略 —— また、伝統文化を継承し、日本人としての自覚に立って国際社会に貢献し得る国民の育成を図ることを目標とした。(第一部 教育改革の基本方向、第四節 改革の基本的考え方)
- ・—— 前略 —— 今後我が国は、自国文化に対する深い認識と敬愛をもちながら異なる文化に対する幅広い理解と寛容の上に立って、—— 後略 ——。(第一部第四節の中の(7)国際化への対応)
- ・一方、よき国際人はよき日本人であることを深く認識し、国を愛する心を育てる教育、日本文化の個性をしっかりと身に付けさせる教育とともに、—— 後略 ——。(同上)
- ・また、今後の教育については、道徳性を養い、我が国の文化や伝統についての理解を深めるとともに、日本人としての自覚に立って、他国の文化を尊重し、—— 後略 ——。(第二部 本審議会の主要課題 4. 初等中等教育の充実・多様化)

(3) Milgram, S., Behavioral study of obedience. The Journal of Abnormal and Social Psychology, 67, 371-378, 1963.

(4) Latañe, B.& Rodin, J., A lady in distress : Inhibiting effects of friends and strangers on bystander intervention. Journal of Experimental Social Psychology, 5, 1969.